

2026.4
APRIL
No.33

高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊 [おらんくの大学病院]

RANK



県内医療機関との連携強化で、
「地域完結型医療」の構築を

病院長 / 内科(老年病・循環器) 教授 北岡 裕章

対談 医学部長 井上 啓史 附属病院長 北岡 裕章
医学部の未来に向けて

RANK

2026.4 APRIL No.33

高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊 [おらんくの大学病院]

[発行日] 2026年4月1日

[発行] 高知大学医学部附属病院 総務企画課 総務・広報係 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮 Tel.088-880-2723

50th ANNIVERSARY

高知大学医学部・旧高知医科大学開学

from 1978 to 2028



高知大学医学部は、
2028年に開学50周年を迎えます。
高知大学医学部開学50周年記念サイト
<https://www.kms-50th.jp>



高知大学医学部附属病院



<https://www.kochi-u.ac.jp/kms/hspt/>

県内医療機関との連携強化で、「地域完結型医療」の構築を

高知大学医学部は、1978年4月に高知医科大学として開学し、2028年に50周年の節目を迎えようとしている。4月に第12代病院長に就任した北岡新病院長から、本院の展望や未来像について伺った。

北岡病院長は本学に5期生として入学し、卒業後は長く本院で勤務され、2018年からは副病院長、医療学系長を歴任されています。2026年4月に、病院長に就任され、感慨もひとしおと思われますが、現在のお気持ちを聞かせてください。

長年、本院で診療・教育・研究に携わってきましたが、思いがけず母校の病院長という重責を拝命し大変光栄であると同時に、責任の重さにただただ身の引き締まる思いです。本院は地域医療の中核を担う大学病院であり、高度医療の提供はもちろん、優れた医療人の育成や医学研究の推進という重要な使命を担っています。開学50周年の節目を迎えるにあたり、本院が築いてきた伝統と実績を大切にしながら、次の

50年に向けてさらなる発展を目指していきたいと考えています。続いて、先生のご専門と本院の現在について教えていただけますか。

私の専門とする循環器内科は皆さんにも馴染み深い心臓の疾患である心筋梗塞、心不全、弁膜症、不整脈などを取り扱います。私は主に心筋梗塞などに対するカテーテル治療、心不全、またその原因として重要である肥大型心筋症や心アミロイドーシスに取り組んできました。一方、老年病学は、高齢者に特有の疾患や身体・精神機能の変化を総合的に研究し、診断・治療・予防・生活支援を行う医学分野であり、高知医科大学開学当初から老年病学講座を設置しています。この分野は特に高齢者を全人的に診ることが

特徴で、最近ではポリファーマシー（多剤服薬）やフレイル（介護が必要となる前段階の状態）対策が重要なテーマとなっています。

高知県の医療水準向上と「健康長寿県構想」の貢献を本院の使命として

本院は高知県唯一の大学病院であり、高度先進医療の最後の砦としての役割を担ってきました。ひき続き高度急性期医療や先進的医療の提供を行うにつれ、医師会の先生方や地域の医療機関との連携を深め、県全体の医療水準の向上および日本の健康長寿県構想に貢献することが、重要な使命であると考えます。



救急救命士と語らう

そこで、災害医療への対応や救急医療を担う人材育成などにより県全体の救急医療体制の質の向上に貢献していきたいと考えています。

医療を取りまく環境の変化や今後についてはどのように考えられていますか。

高知県では人口減少や高齢化に加え、医師や看護師など医療従事者の不足、若手医師の診療科の偏在、さらには経営環境の厳しさによる医療機関の閉院などにより、地域によっては医療提供体制の維持が難しくなりつつあります。特に中山間地域での診療所不足や医師の高齢化、救急医療を含めた「医療へのアクセス」確保が大きな課題となっています。このような状況下で大学病院に求められる役割も大きくなっています。

そのためには、遠隔医療の活用や医療DXの推進などを積極的に導入し、県や関係機関と連携し合いながら地域医療資源を有効に活かした持続可能な医療体制が必要とされます。

また、高齢化率が高く医療従事者不足の課題も抱えている本県での医療体制は、地域に即した

形で構築していくことが重要です。特に、高齢者医療の充実は大きな課題であり、急性期医療だけでなく、慢性期医療、在宅医療、介護との連携を含めた切れ目のない医療提供体制の整備が求められます。

高知県の医療を 将来にわたって 持続可能なものとし、 県民の皆様が安心して 医療を受けられる 体制づくりに取り組んでいく

限られた医療資源を有効に活用するためには、地域の医療機関同士との連携と役割分担が必須となります。急性期医療は基幹病院が担い、回復期・慢性期、在宅医療は地域の医療機関と協力して支えていく「地域完結型医療」の構築が重要であると考えています。

一方で、医療機関との連携強化を図りながら、若手に注目されるワーク・ライフ・バランスを重視した医療人の育成にも力を入れていきたいです。

これまで、病院および医学部運営に関わる中で、多くの職員の皆様

高齢者医療の本質は、急性期医療だけでなく切れ目のない医療を提供し続けること

病院長／内科(老年病・循環器) 教授

北岡 裕章

(きたおか ひろあき)

【経歴】

1988年 高知医科大学 医学部 卒業、同大学 老年病科 入局

1990年 須崎くろしお病院 内科

1991年 国立循環器病センター 内科心臓部門レジデント

2009年 高知大学老年病・循環器・神経内科学 講師

2010年 高知大学老年病・循環器・神経内科学 准教授

2013年 高知大学老年病・循環器・神経内科学 教授

2016年 高知大学老年病・循環器内科学 教授

2018年 高知大学医学部附属病院 副病院長(兼) [~2020年]

高知大学教育研究部 医療学系長(兼) [~2022年]

2024年 高知大学医学部附属病院 副病院長(兼)

2026年 高知大学医学部附属病院長

【専門分野】

虚血性心疾患、心不全、心筋症、高血圧、老年病学

【専門医等資格】

日本内科学会総合専門医、日本循環器学会専門医、CVIT認定医、高血圧専門医、日本老年病専門医



高知医科大学時代 ポリクリ終了後(右から3人目)



須崎くろしお病院にて(医師3年目)

- 趣味 土佐の歴史を訪ね歩くことが好きで、時間に余裕がある時には本院裏手の岡豊山の散策を楽しんでいます。
- 好きなもの／好きなこと 読書、車、ライブ鑑賞
- 信条 "If I try my best and fail, well, I tried my best." 「ベストを尽くして失敗したら、それはベストを尽くしたってことさ」 by Steven Paul Jobs



医学部長／泌尿器科 教授

井上 啓史 (いのうえ けいじ)

【経歴】

1989年 高知医科大学 医学部 卒業
1994年 高知医科大学大学院 卒業(医学博士)

1996年 高知医科大学 泌尿器科 助手
1997年 テキサス州立大学 MDアンダーソン
癌センター-癌生物学科リサーチフェロー
2002年 高知医科大学 泌尿器科 講師
2005年 高知大学医学部
泌尿器科学講座 助教授(准教授)
2013年 東京工業大学 非常勤講師(兼任)、
骨盤機能センター 部長(兼任)
2016年 高知大学医学部 泌尿器科学講座 教授 現職
高知大学医学部附属病院 透析部 部長(兼務)
千葉大学フロンティア工学センター
特別研究教授(兼任)
2020年 高知大学医学部
光線医療センター長(兼務)
2021年 高知大学医学部附属病院
次世代医療創造センター長(兼務)
2023年 大阪大学 工学研究科 招聘教授(兼務)
2024年 高知大学 医学部長(兼務)

【専門分野】

泌尿器腫瘍学、光線力学

【専門医等資格】

日本泌尿器科学会専門医・指導医、
泌尿器腹腔鏡技術認定医、
日本内視鏡外科学会技術認定
(泌尿器科領域)、日本癌治療認定医、
ロボット支援腹腔鏡下手術技術認定、
ロボット支援腹腔鏡下手術プロクター(指導医)認定

もちろんです。私も全く同感で、
病院長からの言葉は本當にうれしい限りです。
ぜひ、共に取り組んでまいります。



医学部長 井上 啓史 対談 附属病院長 北岡 裕章

医学部の未来に向けて

本学の卒業生である北岡新病院長と 井上医学部長が、それぞれの立場から
高知大学医学部の50年を振り返るとともに、今後について語り合った。

医学部長室にて

これからも、高知を愛し高知大学を愛する
医療人の育成を行っていききたいと思っておりますので、
井上医学部長、力をお貸しくください。

北岡病院長が高知医科大学に在籍
されていた当時と現在の校風に、
違いはありますか。

北岡 振り返ると、私の学生時代
は覚えるべき医学的知識が今ほ
ど多くはなかった分、教官の研究
内容や先端的な医学の講義が主
体で、医師になるための土壌を
しっかり学べたと記憶していま

す。一方で、現在の学生たちは、習
得すべき医学的知識が格段に増
加しています。知識を得るスピー
ドや情報へのアクセスは、我々と
は比べものにならないほど優れて
いる反面、じっくり考える機会や
物事の本質を議論する時間も限
られているように感じています。
高知大学医学部の学生たちには
ぜひ、知識や技術だけでなく、患者

さんに寄り添う姿勢や物事の本質
を学んでいただきたいと切に願っ
ています。
医学は知識だけで完結するも
のではなく、人と向き合う中で深
まっていく学問でもあり、大学と
しても、実践的な学びの機会を提
供しつつ、地域とともに成長でき
る医療人育成に重きを置くこと
が大切ですね。

今回、病院長という立場から、
改めて大学病院として地域医療
を支え、次世代の医療人を育成
し、医学の発展に貢献していくと
いう使命感をひしひしと感じて
います。

井上医学部長も本学の卒業生で
いらっしゃるようですが、いかがで
しょうか。

井上 学生時代の懐かしさはも
ちろんですが、高知医科大学で
学び高知県の医療に従事してき
た感謝が第一にあります。今再
び母校の高知大学医学部を起点
として、ふるさと高知のために
教育(人づくり)、研究(未来の人
のため)、臨床(目前の人のため)
に取り組ませていただいている
喜びも大きいです。高知への恩

医療を支え牽引していく高知ブラ
ンドの医師、看護師、医学研究者を
四国高知から世界に向けて輩出し
ていこうと考えています。

本学からは、建学の精神である
「敬天愛人」「真理の探究」のも
と、開学以来5,700名以上の
優れた医療人を輩出し、国内外
においても数多くの卒業生が活
躍しています。そして2028年
には、学生および教職員とも
に、「高知大学医学部・旧高知医
科大学開学50周年記念事業」と
して医学部会館(通称がっかん)
の増築・改修を計画しています。
長きにわたり支えていただいた
卒業生とご家族、さらには
地域の皆さまに感謝しつつ、志
を新たに次世代の医療人育成強
化に向け一層の飛躍を目指して
まいります。

返しのために全力を尽くし、高
知大学をさらに進化させ、発展
と飛躍へ努力と挑戦を続ける覚
悟です。

在学当時、私は高知医科大学6
期生でしたから、開学から間もな
いこともあり、「これから我々学
生たちが、一丸となって学風を作り
上げるんだ!」という気概が大学
中に満ち溢れていましたね。自ら
一定の節度は保ちつつ、良くも悪く
も、破天荒で魅力的な教員や学生
が多く、期待に胸躍らせていたこ
とを思い出します。

この節目に、あの時代の人間味
溢れるキャンパスに帰帰すべく、新
たな気持ちで次の一步を踏み出し
たいですね。

井上医学部長、今後の抱負をお
願ひします。

井上 高知大学医学部は、「学生
も教職員も地域も、ともにワクワク
できる学びの場、高知大学
医学部」をキャッチフレーズに
掲げて、先進的な医学教育およ
び医学研究を推進すべく、様々
な取り組みを行ってきた歴史が
あります。

取りわけ、「先端医学」と「地域
医療」という現代社会が求める2
つの大きなテーマを基軸に、未来の
最後は、北岡病院長からメッセー
ジをお願いします。

北岡 組織の礎は「高度な医療を
提供し、高い見識を持った医療人
を育成する。」「先進医療を推進
し、医療の革新に挑戦する。」とい
う理念にあります。そして、この理
念を掲げることができる医療機関
は、県内には我々の病院しかあり
ません。だからこそ「高知県の高度
先進医療の砦」としての矜持・プラ
イドをもって働いて欲しいのです。
多くの医療人が互いに尊重し合
い、力を合わせることで、この困難
で不確実な時代を乗り越え、新し
い時代を切り開くことが必ず出来
るはず。そのために病院長と
してスピード感を持って環境整備
と支援をしてまいります。



医学部開学50周年記念事業案内リーフレット

常に、新たな知識と最善の医療ケアの提供が求められている。



原田 この機会に皆さんとじっくり向かい合ってお話ができることはすごくうれいすね。どんなお話しが伺えるのか、とても楽しみです。

本院は大学病院として教育研究診療の役割を担い、高度医療を提供する特定機能病院です。開学以来50年を迎え、附属病院として高知県民の医療を支えてきました。高齢化の進む高知県にあつて、医療はより高度・複雑化しています。職員は常に新たな知識・技術を習得し、最善の医療ケアを提供することが求められています。

昨年新棟がオープンし、より多くの患者さんを受け入れることができようになり、日々大変多忙な中でも、職員は患者さんに寄り添い、医療ケアを提供しています。

現在私は看護部長になり2年を迎え、より働きやすい職場となるよう取り組んでいるところです。看護部には多くの職員が所属しています。看護職員が一生懸命に患者さんやご家族に向き合う姿に触れると、私も嬉しく、感動を覚え、力をもらっているように努めています。

山本 臨床工学部では、4つのチームを軸に業務を行っています。手術部・ICUチームでは、当日の手術で使用する機械の準備や使用前点検から始まり、生命維持管理装置などのたくさんある機器操作を行っています。また、院内で使用する医療機器は、臨床工学部で三元管理を行い、年間27,400件ほどの点検を実施しながら安心してご利用いただけるように努めています。

カテーテル・ペースメーカーチームでは、医師と共に心臓カテーテル検査や不整脈治療を行い、血液浄化チームでは、血液透析や特殊治療にも対応しています。表には出ない部門ですが、本院のような大学病院ではなくてはならない存在です。

新しい治療や機械が次々導入されますので、スタッフの勉強会や院外研修など知識の習得にも力を入れています。

患者さんが元気になれることはもちろんですが、新しいことにチャレンジできる環境も私たちの自信や



最先端医療機器の安全な使用を目指して。

ています。皆さんも業務に関わる中で、やりがいや喜びを感じることがあるんじゃないかと思いますが、いかがでしょうか？

門田 薬剤師の仕事といえば「薬を準備してお渡しする」といったイメージが強いかもしれませんが、実際には患者さんへの処方内容が最適かつ安全か、飲み合わせや副作用のリスクはないかななどの確認が重要で、それらが治療の安全を支えていると考えています。

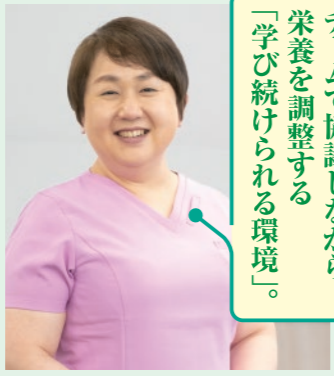


治療の質を上げる最後の安全弁です。

また、薬剤師は治療の質を上げる役割もあり、最後の安全弁という認識で取り組んでいます。薬を通して治療がスムーズに進んだり、患者さんの不安が柔らいだ瞬間はこの上なく嬉しく、また、チーム医療の中で、薬の専門家として信頼を得ていることを実感した時にもやりがいを感ずります。働き方の面でも、日常生活と両立させながら周囲と支え合い、キャリアを積める環境に助けられてきたと実感しています。

やりがいに繋がっています。また、身近に大学院という「研究文化」があることも恵まれていると感じています。

原田 皆さんそれぞれ大学病院における重要な業務を行いながら、かつ学習を継続することが必要な立場にいる分、やりがいや達成感も大きいのでしょうか。



チームで協議しながら栄養を調整する「学び続けられる環境」。

炭谷 がん治療や重症患者など、専門性が必要な大学病院の医療の中で、「ただ食事を作つて出すこと」だけでなく、治療の「環」として栄養を調整する役割を担っていることに、良い意味での緊張感があります。食事の種類、食形態、経腸栄養などについて、スタッフ間で協議しながら患者さんへの提供内容を考えるという工程は、私達の大きな学びとなっています。

栄養研修生・実習生に対する指導や、学会での発表なども良い刺激になり、また、後進に伝えることは、自

これまでと、これから

本院は1981年の開院以来、「おらんくの大学病院」として高知県の皆さんと共に歩んできた。ここでは、本院各部署の方々に今後の抱負について伺った。



看護部
原田 千枝
(はらだちえ)

栄養管理部
炭谷 由佳
(すみたに ゆか)

薬剤部
門田 亜紀
(かどた あき)

医療技術部
臨床工学部門
山本 奈緒
(やまもと なお)

医療技術部
リハビリテーション部門
細田 里南
(ほそだりな)

身の喜び、自信に繋がっています。本院は症例数が多く、「学び続けられる環境」も大学病院ならではです。スキルアップや資格取得を目指す方にとつてやりがいのある職場だと思えます。

細田 「決められた業務をこなすだけではないけないのはリハビリテーション部も同じで、「その人のこれからの生活」を見据えて関わる医療です。から、多職種協働を前提として、時間の経過と共に変化する患者さんの状態に寄り添い続けるという特性があります。急性期から回復、地域生活へと続くプロセス全体を視野に入れながら包括的に支援していくことが求められています。

本院には、新たな挑戦を後押ししてくれる風土が根づいています。そうした環境の中で患者さんの小さな変化に立ち会えること、多職種と力を合わせ成果を生み出せることが大きなやりがいに通じています。

常に変化する患者さんの状態に寄り添い続ける。



原田 各部署が業務に真摯に向き合っており、仕事への誇りや情熱が伝わってきて何だか胸が熱くなりました。

では最後に、2028年の医学部開学50周年に向けて抱負をお聞かせいただけますか。

門田 薬剤師として、「安心をつくる存在」であり続けたいと思います。「患者さんが安心して治療を受けられるように」を常に意識しながら、次の50年に向けて、地域の皆さまに信頼される存在になりたいと思つています。

山本 臨床工学技士はよく、「機械を相手にする仕事」と言われます。ただ、それを使用するのは医療者であり、それが背景には必ず患者さんがいます。臨床工学技士は技術職から専門職へとアップデートを遂げ、今なお進化を続ける職種であると考えています。他の医療職の皆さんと力を合わせて、これから

も全身全霊で、安心・安全な医療を提供できるよう努めます。

細田 私も人材を育て教育していくことの大切さを強く感じています。今また初心にかえり、高度な医療に対応できるリハビリテーション専門職として知識と技術を磨き、次代に適應できる人材育成に丁寧

に取り組み心構えです。これまで以上に、二人ひとりに向

き合い、さまざまな価値観やライフステージを持つ職員が安心して働ける環境を整え、それぞれの力を発揮できる組織づくりを進めていきたいと思つています。

炭谷 患者さんの治療と食生活支援に、管理栄養士と調理師が「丸」となり取り組んできた先輩方のこれまでの歩みに感謝します。栄養管理は単なる食事提供ではなく、治療効果と回復の重要な要素である、多くの患者さんから学ばせていただくとともに、私の原動力になっています。

原田 皆さんの頼もしい言葉を聞いて安心しました。私が入職してから30年以上が経ちましたが、この間医療は進化、発展を続け、高知大学医学部は1978年の開学以来、全国で活躍する数多くの医療人を輩出しています。これからも、それぞれが目標を掲げ、全スタッフが力を合わせて取り組んでまいります。